

「住み続けられる国土」の地域構造の 変遷について

国土形成計画(全国計画)における国土の基本構想

- ✓ 都市と農山漁村は依存関係にあり、相互に作用し、貢献することで、我が国の国土は形成されている。
- ✓ 一方、都市、農山漁村とも前述した国土に係る状況の変化を受け、それぞれに異なった課題が発生してきている。
- ✓ このような課題は、都市、農山漁村が別々に取り組むだけでなく、「田園回帰」等の動きも踏まえ相互に協力して取り組むことで解決の道筋が見える可能性があり、この点でも都市と農山漁村の相互貢献が求められる。

(引用)国土形成計画(全国計画)、国土交通省、平成27年8月

集落(農山漁村)の
課題と強み

地方中小都市の
課題と強み

地方中枢都市の
課題と強み

大都市の
課題と強み

都市郊外の
課題と強み



「住み続けられる国土」専門委員会における平成28年度調査審議事項

- 近年、若者を中心に生まれつつある「田園回帰」の流れもとらえ、都市と農山漁村が新しい形で相互補完的に共生し、活発に対流する地域構造を実現し、持続可能な地域づくりを進めるために講ずべき施策のあり方について議論。

生活圏の長期的な変遷

生活圏の長期的な変遷を定量的に見ると、日常的な移動行動の目的地は、この20年間で、より人口規模の大きな都市へと玉突き状に移り、現状では目的別に多様化している。

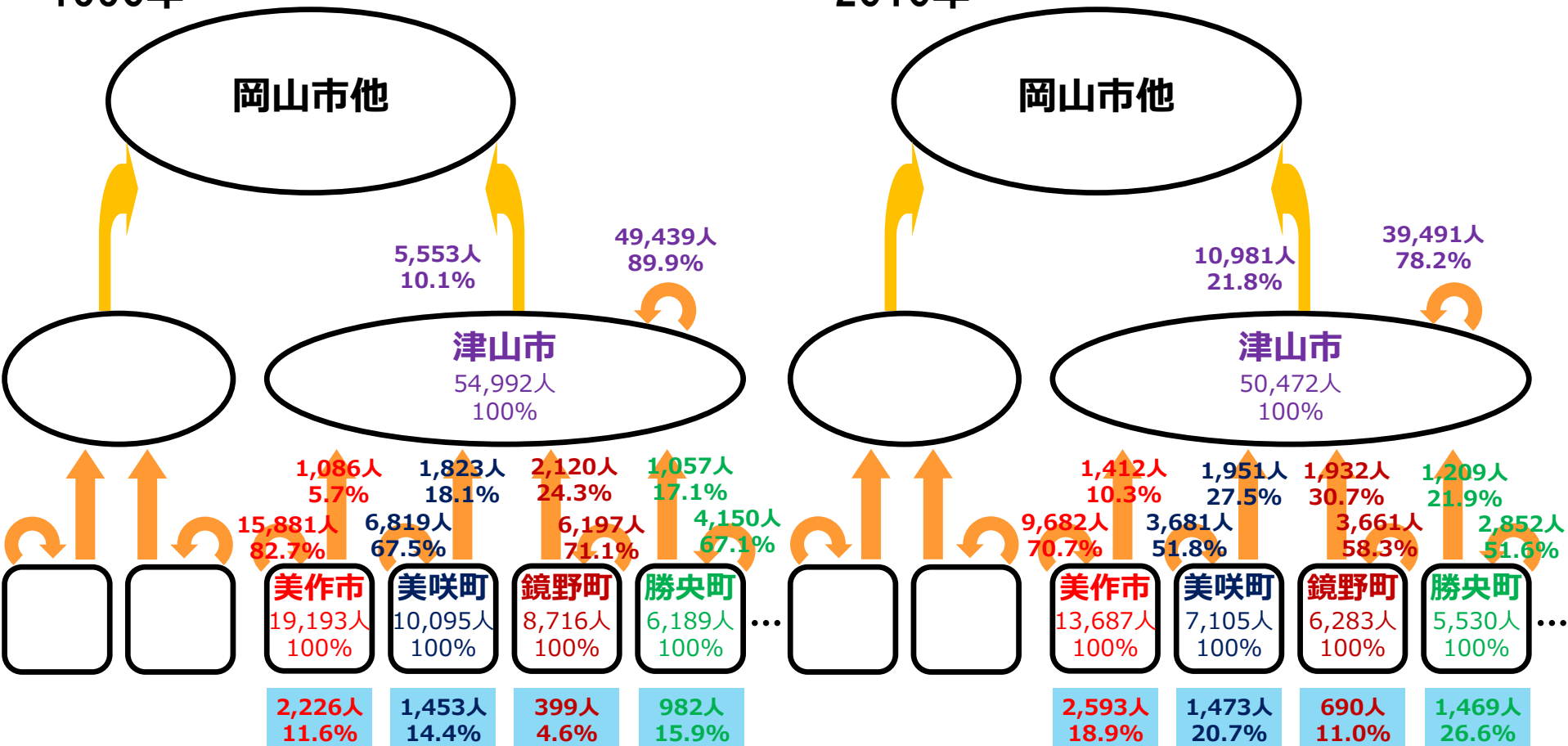
日常的な行動範囲 (目的別)	過去20年間の推移		現在の状態
	1. 津山市周辺地域	2. 北部九州地域	3. 丹後地域
①通勤(平日)	5%通勤圏	全目的での 移動圏域 (高齢者、非高齢者)	5%通勤圏
②買い物(平日)	(谷口委員による分析あり)		5%買い物圏
③買い物(休日)			5%買い物圏
非日常的な行動範囲 (レジャー)		—	—

通勤圏の変遷の例(津山市)

- 津山市の周辺では、就業者のうち市町村内が従業地である人数、割合ともに減少傾向にあり、津山市が従業地である人数、割合ともに増加傾向にある。
- 津山市においても、就業者数のうち津山市内が従業地である人数、割合ともに減少傾向にある。

1990年

2010年

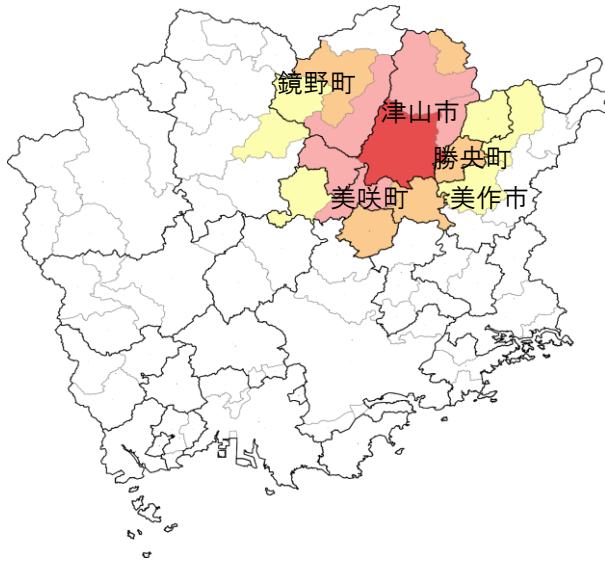


津山市で従業する 就業者数・割合
 自市町村内で従業する 就業者数・割合
 その他で従業する 就業者数・割合

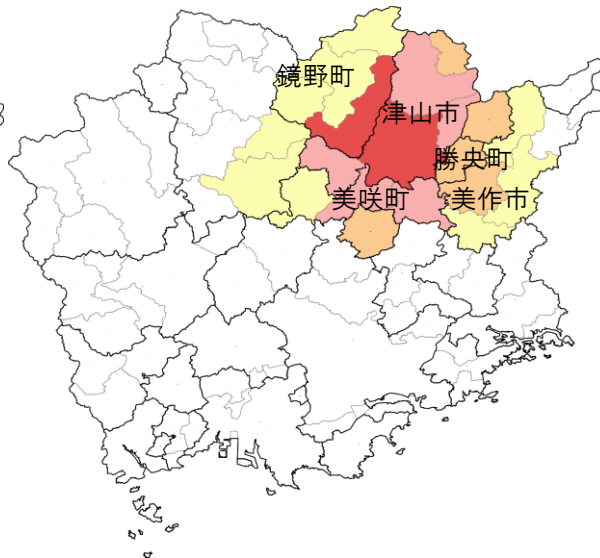
通勤圏の変遷の例(津山市)

- 津山市の周辺では、津山市が従業地である割合は、津山市に近いほど高く、経年的に増加傾向にある。
- 津山市が従業地である割合が5%以上である市町村の範囲は拡大する傾向にある。

【H2(1990)】



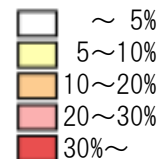
【H12(2000)】



【H22(2010)】



津山市への通勤移動率



津山市:平成17年2月28日に津山市、加茂町、阿波村、勝北町、久米町が合併

鏡野町:平成17年3月1日に富村、奥津町、上斎原村、鏡野町が合併

美咲町:平成17年3月22日に中央町、旭町、棚原町が合併

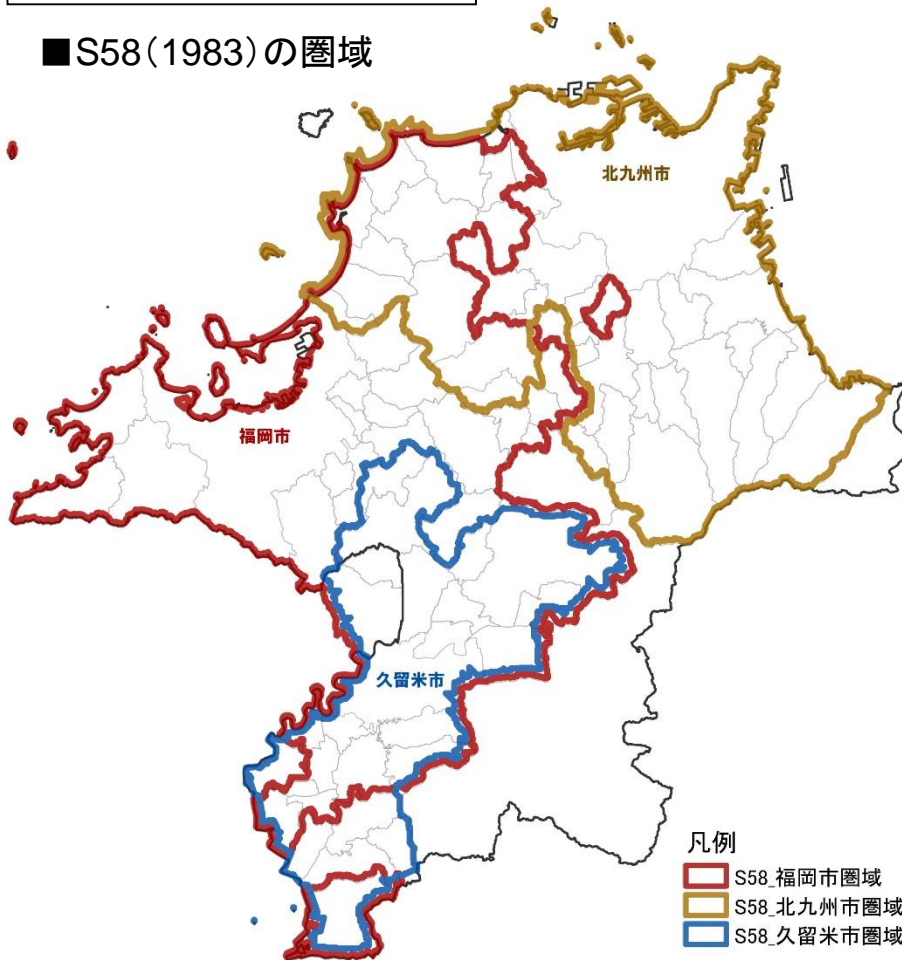
美作市:平成17年3月31日に勝田町、大原町、東粟倉村、美作町、作東町、英田町が合併

生活圏の変遷(過去20年間の推移)

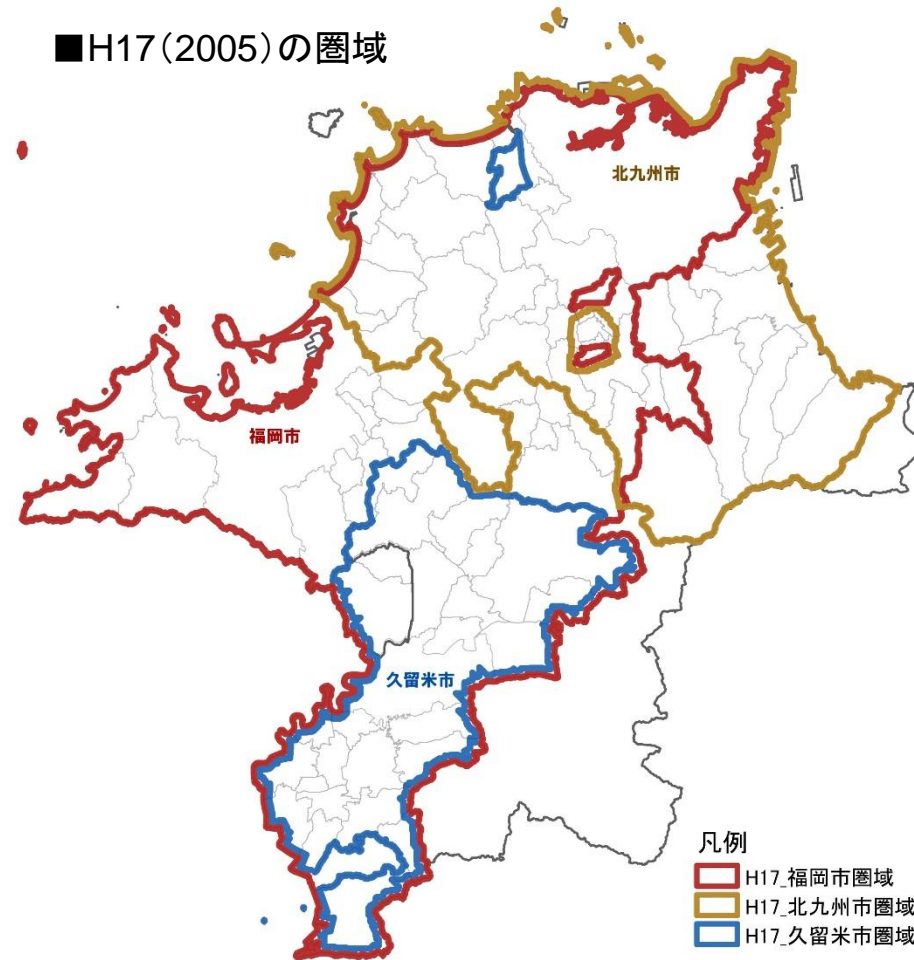
- S58からH17の間に北九州市及び久留米市の圏域※はあまり変わっていない。
- 一方で、人口や都市機能の成長が著しい福岡市の圏域の拡大が顕著で、他圏域と多様化している。

S58(1983)→H17(2005)

■ S58(1983)の圏域



■ H17(2005)の圏域



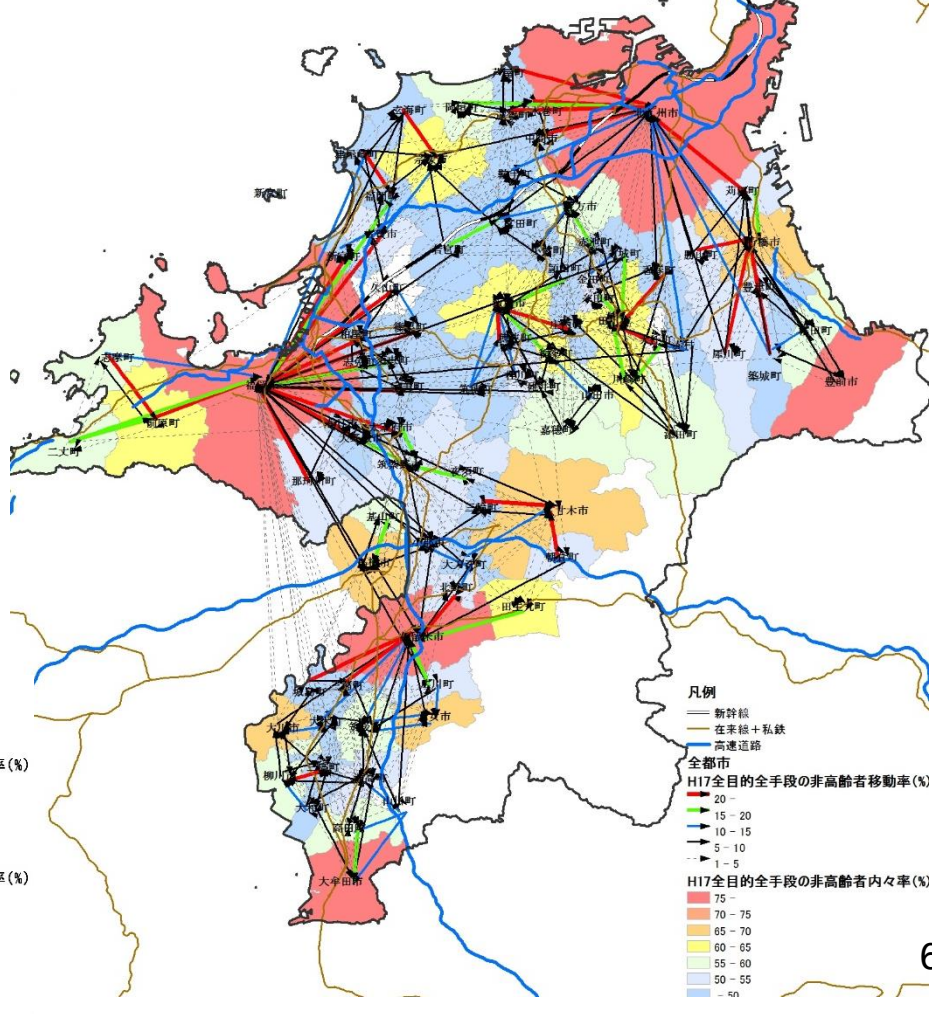
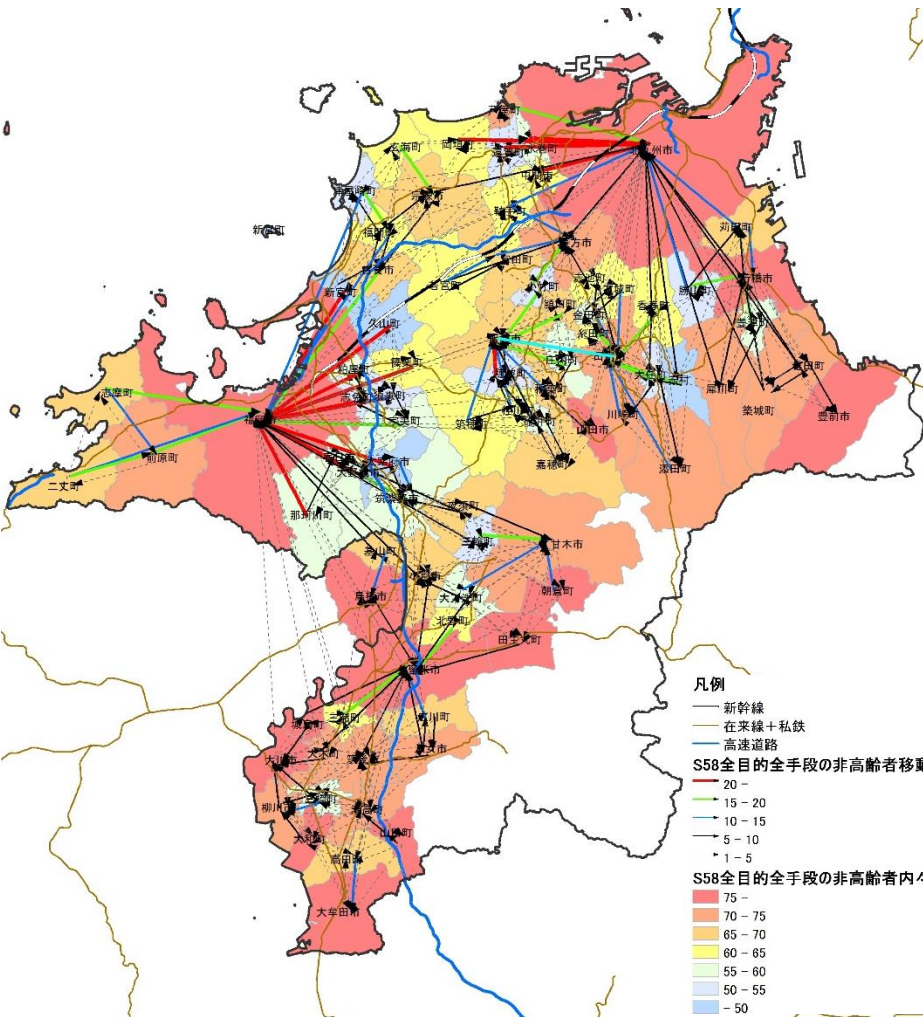
※ 主要都市(福岡市・北九州市・久留米市)への移動率から設定
(出典)北部九州圏パーソントリップ調査

- 経年的に非高齢者の移動の目的地は市町村を超えるようになり、全体的に市町村内々率が低下する傾向にある。

非高齢者の「内々率」と「移動率」の変化(S58(1983)→H17(2005))

■非高齢者の内々率と移動率(H58(1983))

■非高齢者の内々率と移動率(H17(2005))

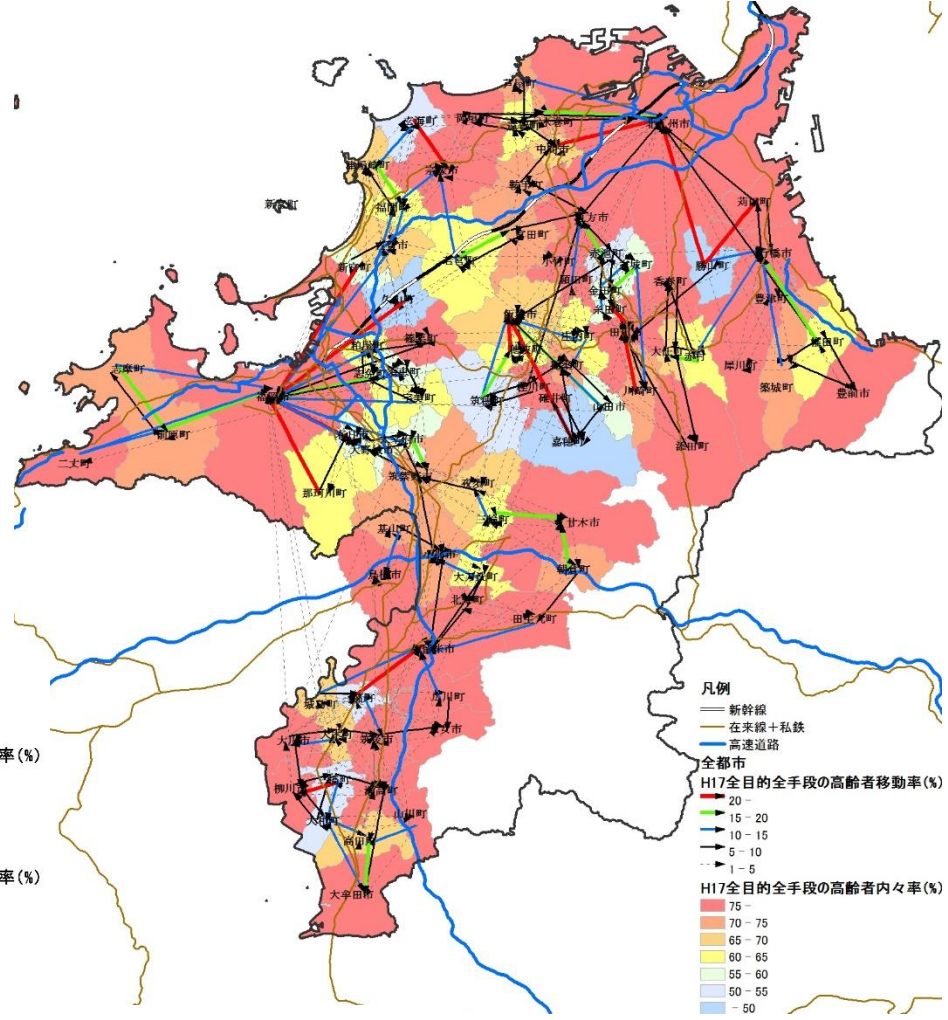
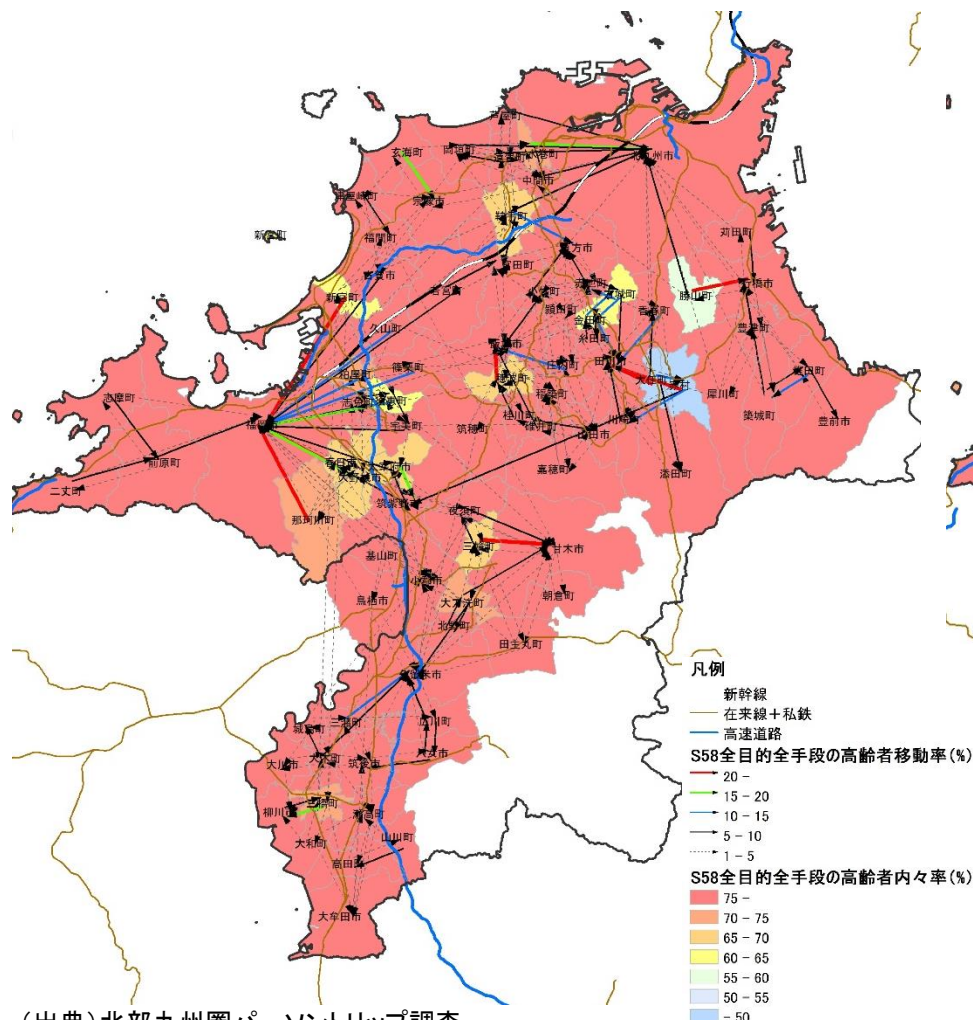


- 経年的に高齢者の移動の目的地は市町村を超えるようになり、全体的に市町村内々率が低下する傾向にあるものの、非高齢者ほど顕著ではなく生活圏は狭い傾向にある。
- 高齢者のH17免許保有率は37%であり、非高齢者の79%と比較して低いことも影響していると考えられる。

高齢者の「内々率」と「移動率」の変化(S58(1983)→H17(2005))

■ 高齢者の内々率と移動率(H58(1983))

■ 高齢者の内々率と移動率(H17(2005))



(出典) 北部九州圏パーソントリップ調査

目的による生活圏の違い(現在)

- 大阪市、京都市、神戸市から離れた丹後地域では、2万m²程度の比較的規模の大きな総合スーパーが立地する都市(福知山市、豊岡市)では、同じ平日でも通勤圏と買物圏では圏域が異なり、更に休日の買物圏はより広い地域から移動している。

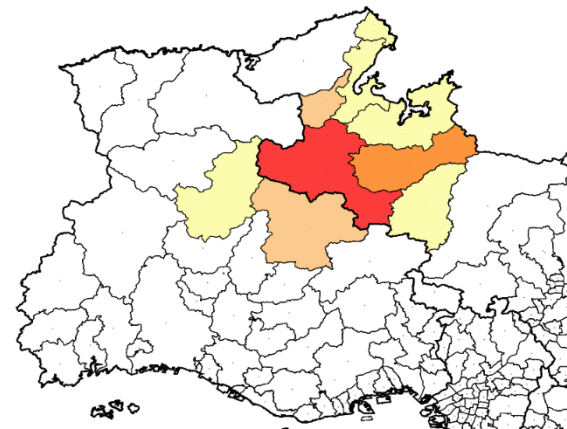
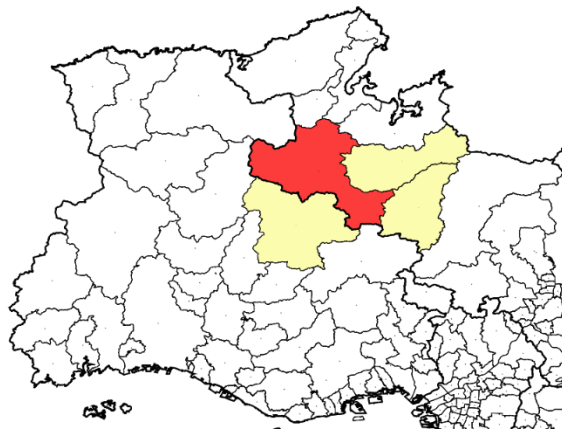
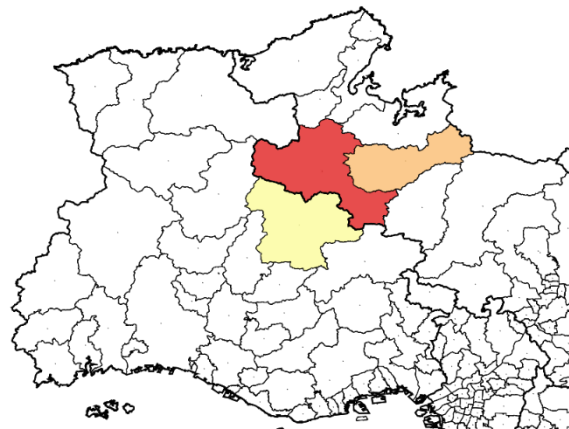
丹後地域の平日通勤圏と平日・休日買物圏の例(H22(2010))

平日/通勤圏 (国勢調査)

平日/買物圏

休日/買物圏

福知山市

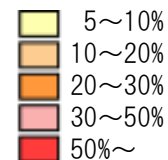
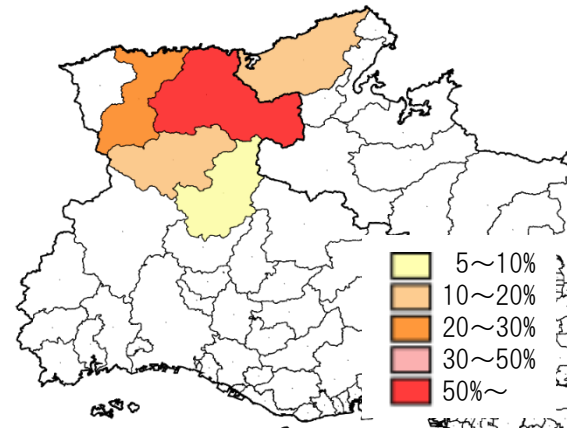
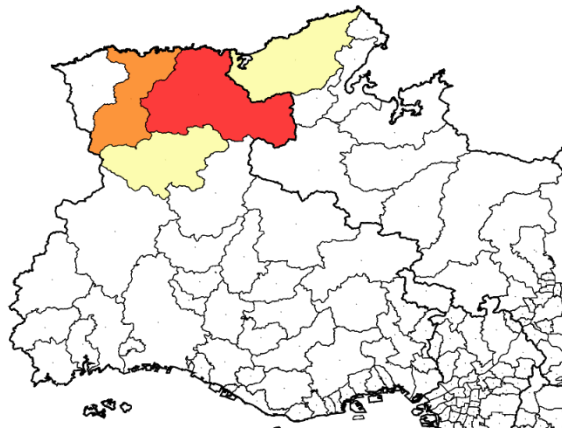
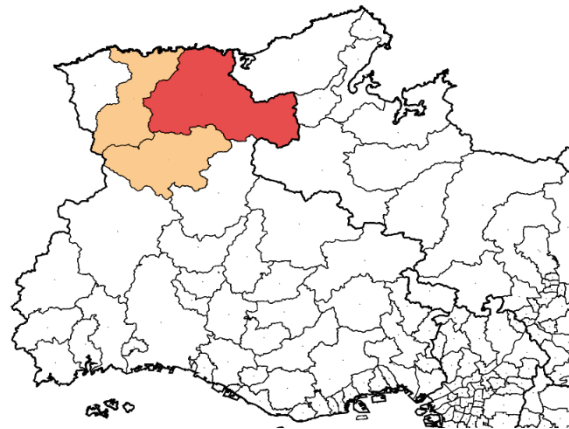


平日/通勤圏 (国勢調査)

平日/買物圏

休日/買物圏

豊岡市



生活圏のイメージ

- 居住地の住民からみると買物、医療、娯楽等の目的により利用する圏域は異なる。目的別の圏域を総合したものが生活圏であると考えられる。
- 拠点の大きさ、機能の高度化の度合いにより影響範囲は異なる。
- 将来の人口構成の変化により、地域構造も変化する可能性。

【拠点都市からみた圏域のイメージ】

規模の大きい拠点都市の圏域は大きい

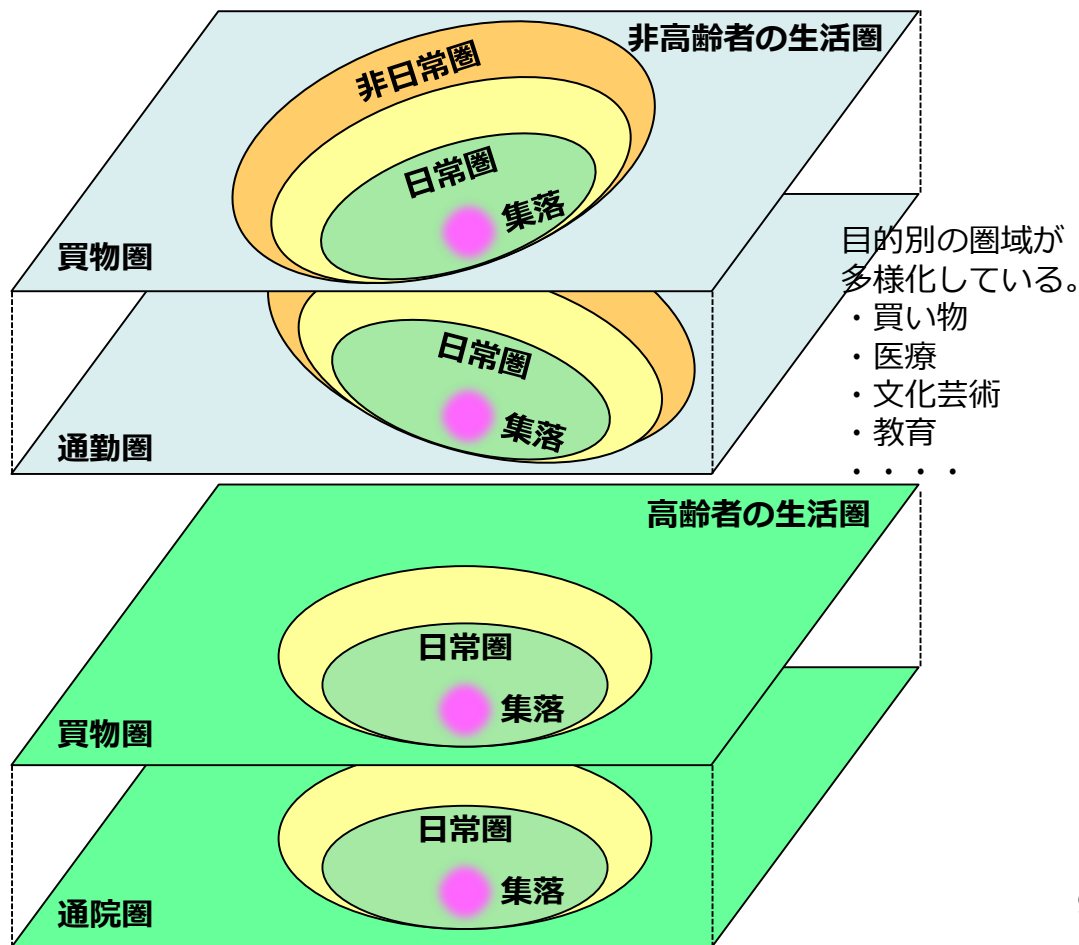


拠点が大きいほど
機能の高度化しているほど
影響範囲は大きい

規模の小さい拠点都市の圏域は小さい



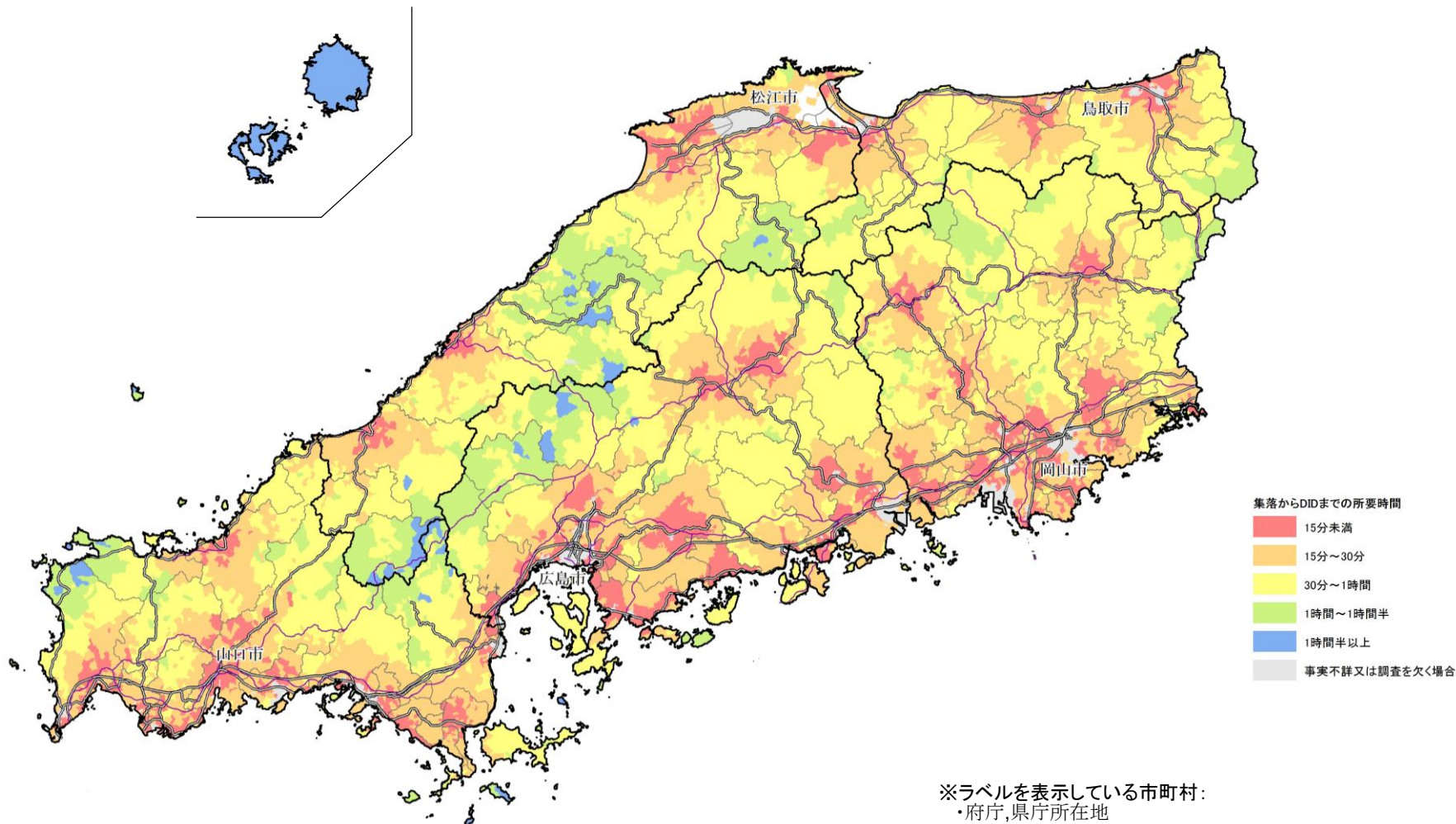
【居住地の住民からみた目的別生活圏のイメージ】



集落からDIDまでの所要時間(日常圏)

- 中国山地の地域の中には、集落から最寄りのDIDまで1時間以上となる地域があり、中には1時間半以上の地域もある。

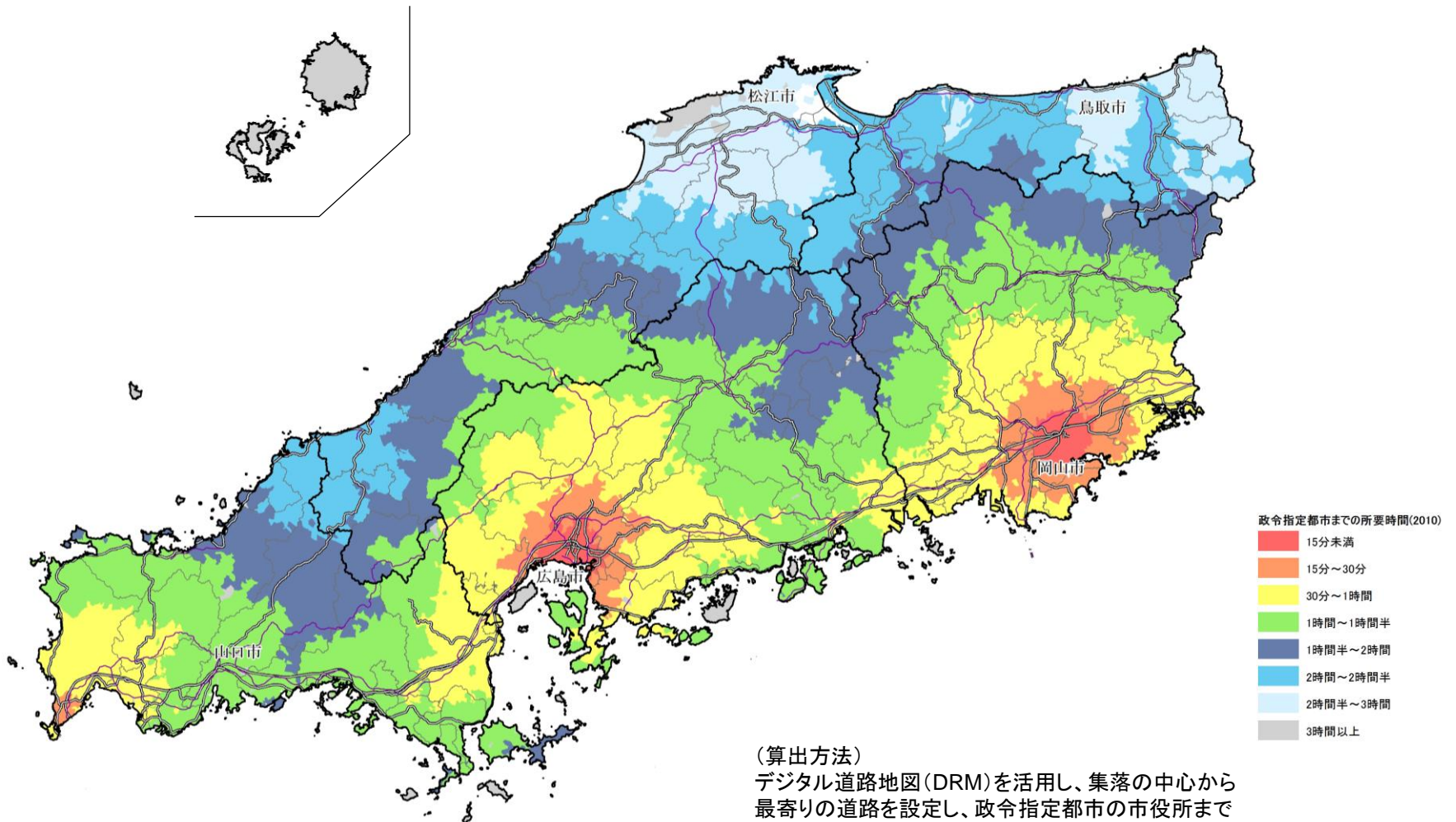
集落からDIDまでの所要時間



政令指定都市までの所要時間(非日常圏)

- 中国地方では、政令指定都市までの所要時間が1時間半以上となる地域がある。山口県東部は広島市の圏域、西部は北九州市の圏域に含まれている。

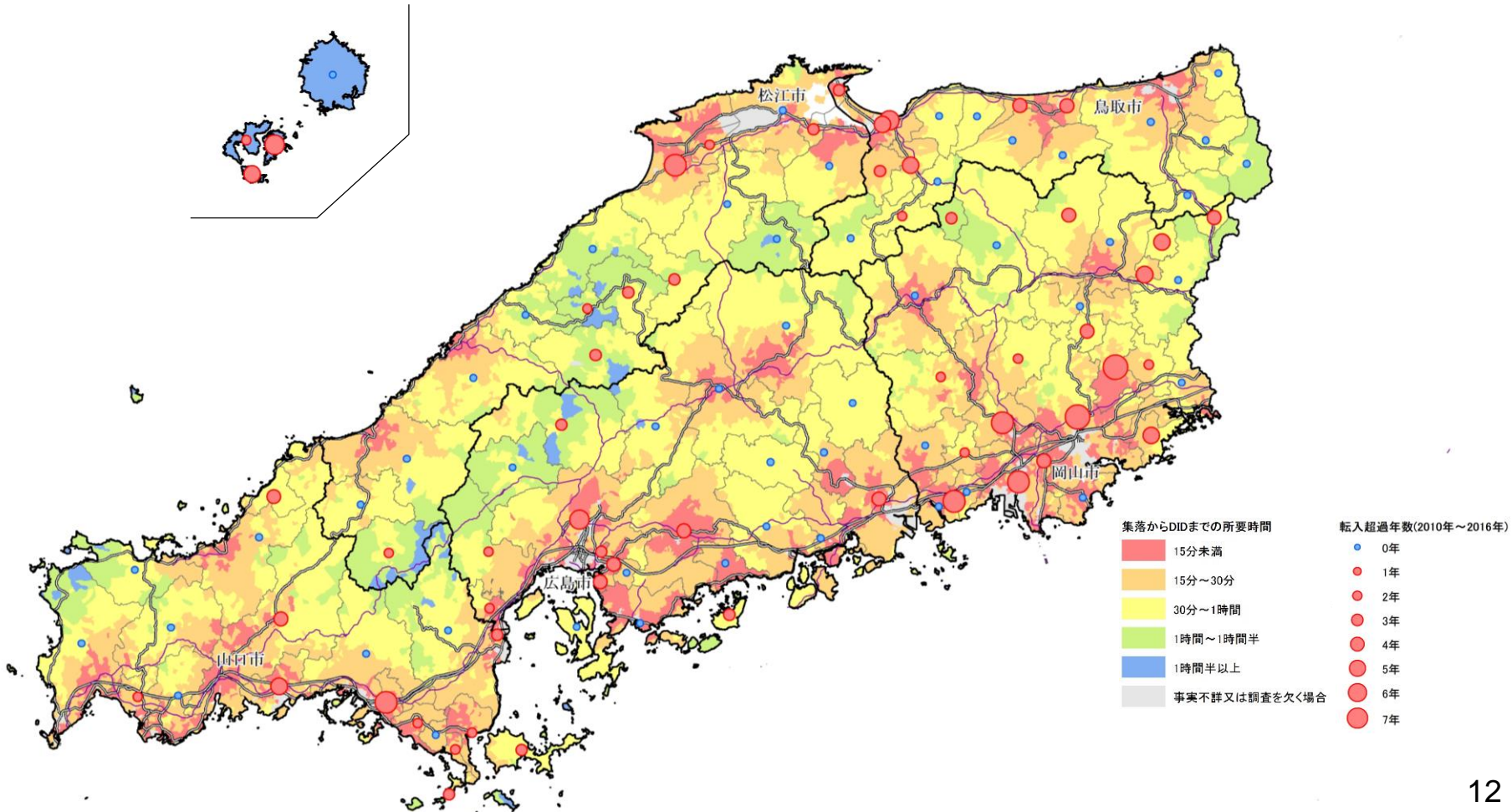
集落から政令指定都市までの所要時間(非日常圏)



集落からDIDまでの所要時間(日常圏)と人口増加

- 集落地域に居住する住民から見て、DIDまでの到達所要時間が1時間以上かかる、いわば都市までのアクセスが日常圏から外れてくる集落地域(図中緑～青色)の中にも、転入超過が続いている市町村が少ない数で存在する。

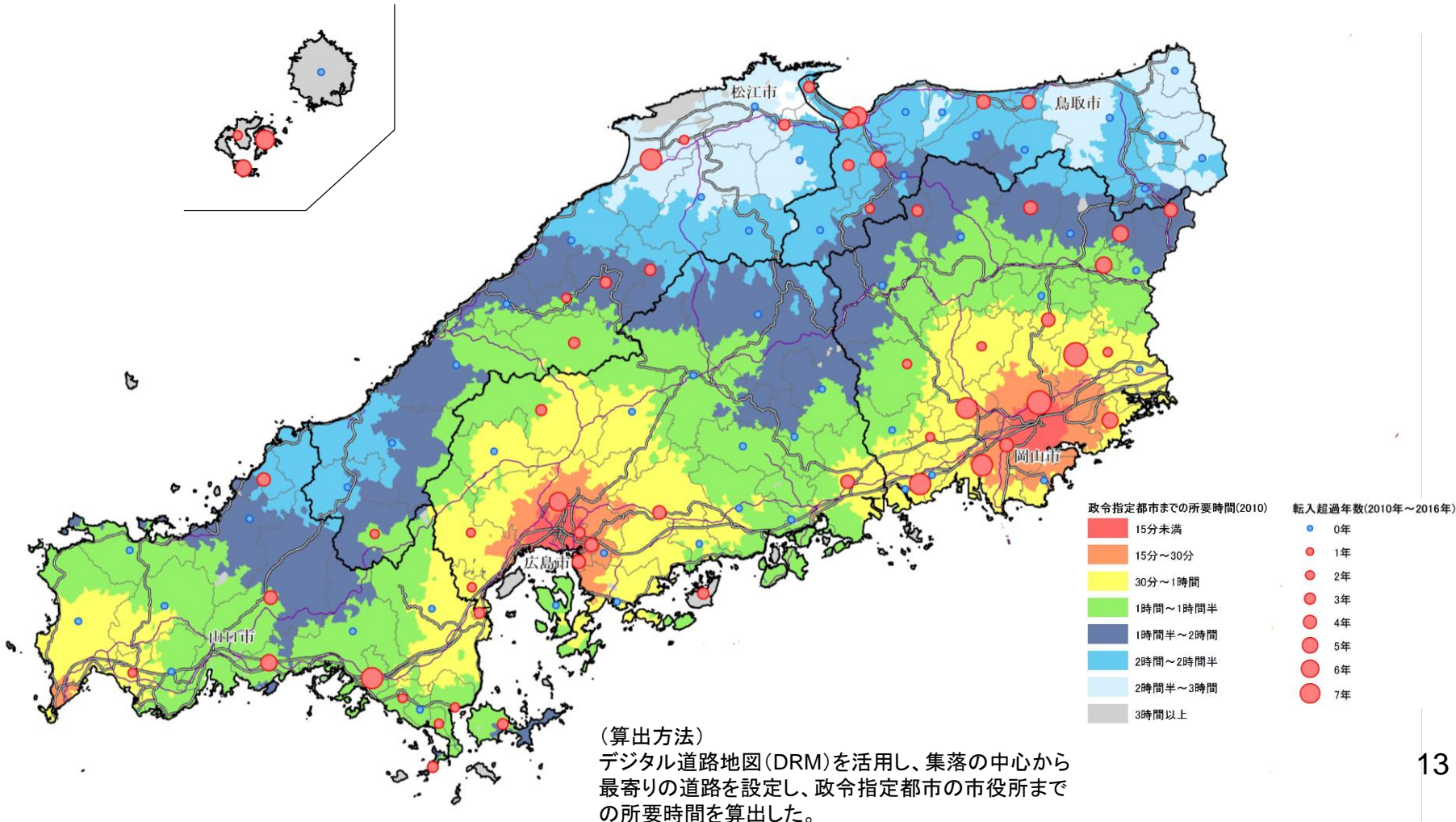
集落からDIDまでの所要時間(日常圏)と人口増加



政令指定都市までの所要時間(非日常圏)と人口増加

- 政令指定都市の住民からみて、所要時間が1時間半から2時間以上かかる、いわば非日常圏となる集落地域において、転入超過が続いている市町村が存在する。

集落から政令指定都市までの所要時間(非日常圏)と人口増加

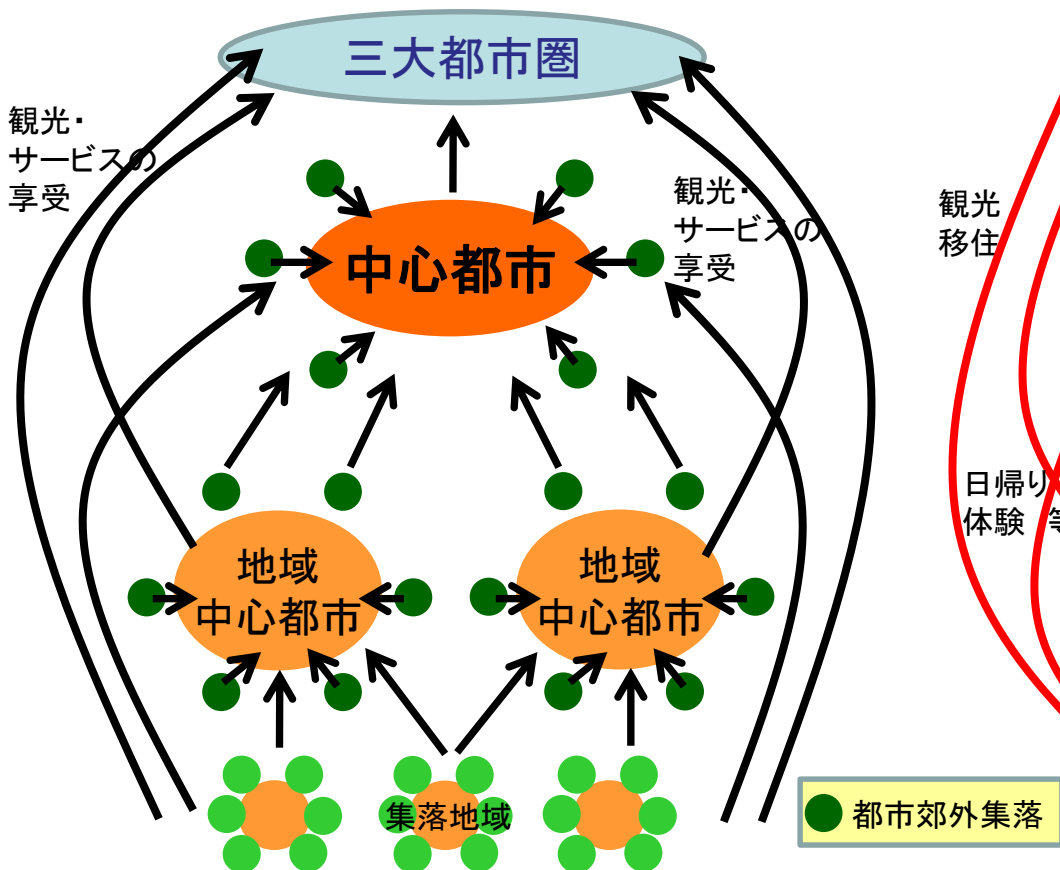


地域構造(農村→都市、都市→農村の移動)

- 通勤、通学、買い物、通院などの目的では、農村からより高次の都市に向かいサービスを楽しむ。
- 観光、体験、転居、移住などでは三大都市圏を含む都市から農村への移動が起こっている。

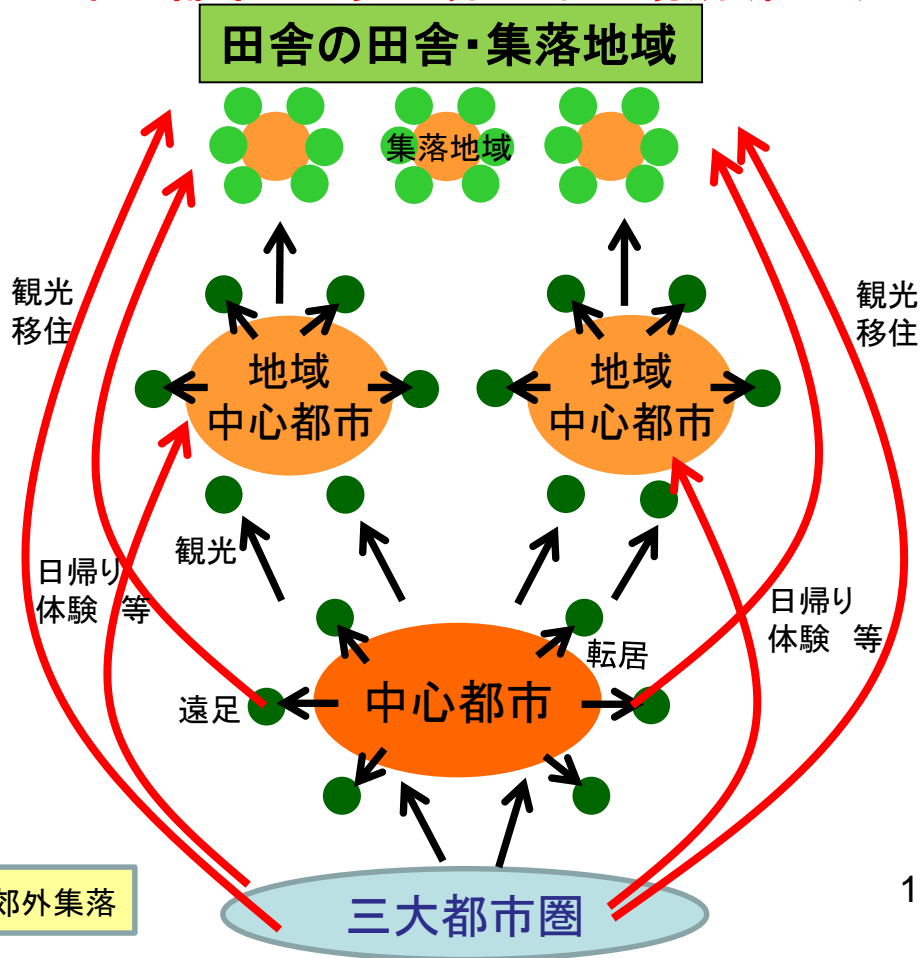
農村→都市

集落地域から見た非日常の場所(憧れ)
地域中心都市は日常の場所



都市→農村

中心都市から見た非日常の場所(憧れ)



「森の京都」綾部市マスタープラン

- 京都府の「森の京都」プロジェクトに位置づけられたことをきっかけに、「森の京都」綾部市マスタープランを策定。
- 既存の観光資源の活用、市民団体との連携を通じて、子供をメインターゲットとした森林や里山・農村の機能や可能性を学び実体験できる交流拠点づくりを通して、農村都市交流を推進するとともに、定住の促進を目指す。



モデルフォレスト活動【グンゼ】



里山ねっと・あやべ【竹炭づくり体験】



里山ねっと・あやべ【親子木工教室】



間伐材研究所【枝打ち作業】

水源の里集落

～移住者・ボランティアの状況～

【水源の里集落への移住者】

- 平成20年度以降は22世帯52人が移住。
（綾部市「定住サポート総合窓口」を介した移住者の情報）
- 22世帯の内8世帯が子育て世代であり、高校生までの子どもは16人。
- 移住者の前住地は、京阪神が中心。

【水源の里集落のボランティア活動】

- 平成27年度実績 延べ521人が参加し、全て古屋集落での取り組み。
- 主な取組内容は、道普請、栃の木育成調査、栃の実拾い、栃餅づくり講習など。
- 平成28年度は、9月末現在で延べ560人が参加し、古屋・市志集落で活動。



古屋集落のボランティア活動



ボランティア～栃の実拾い～



古屋公民館

大都市近郊における事例（糸島市）

糸島市への移住の動向

- 福岡市中心部から鉄道で45分の糸島市は、海、山、田園風景が揃う豊かな自然を有しており、福岡市のベッドタウンとして転入者が増加している。
- 2013年は、30代、40代及び15歳未満の東京圏、関西からの転入超過数は40人である。
- 芸術活動者も移住してきており、現在で約100人の芸術活動者が創作活動をしている。「糸島クラフトフェス」が糸島市を代表とするイベントとなっている。

※東京圏：東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県
 関西：三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県



糸島の芸術家活動者が一堂に集結するイベント「糸島クラフトフェス」

JA直売所「伊都菜彩」

- 全国のJA直売所で最大の売り上げを誇る「伊都菜彩」があり、休日には1日5000人以上の来店者がある。



糸島の野菜

深いこだわりで育てられた高い品質の「米」「野菜・果物」「花」「糸島牛・糸島豚」。そんな糸島の恵みを消費者に知っていただく場として、伊都菜彩があります。

資料：伊都菜彩ホームページ

糸島スタイル

- 「糸島スタイル」をコンセプトに、移住経験者へのインタビュー、移住相談のリンク等を掲載し、移住に関連する情報を積極的に配信。



資料：糸島スタイルホームページ

資料：糸島市観光振興基本計画
 糸島市人口ビジョン

河辺いきものの森

- 滋賀県東近江市の河辺いきものの森は、里山保全活動団体「遊林会」と市と協働して保全・活用を行っている森である。
- 河川に沿って分布する森林のことを、河辺林といい、かつて、河辺林は、水害の防備や農用林（里山）として大きな役割を果たしたが、森の利用がされなくなると植生遷移の進行や竹林の拡大により、里山の姿が見られなくなった。

- 河辺林は、低海拔地でありながら山地性の植物が生育するという特徴も持ち、貴重な森である。この森を保全するために、1998年より、ボランティア団体「遊林会」が里山保全活動を始めた。
- 現在では、保全した里山を利用して、自然観察路、ネイチャーセンター、水辺のビオトープ、林冠トレイルなどが整備され、人々が自然にふれ親しむ場、環境学習や体験学習の場として利用されている。

河辺いきものの森の全体像



自然観察路



ネイチャーセンター



水辺のビオトープ



林冠トレイル



2つの施策の方向性からみた論点(例)

1. これまでとは逆向きの、都市部から非日常空間としての農山漁村部に向かう動きを支援。

(1) 本格的な遠隔地である農山漁村への移住(田園回帰)の動きを加速させるために必要な広義のインフラには、どのようなものが考えられるか。

【例】 リニューアル可能な古民家(又はそれを支援する制度)、高度な通信環境、コンビニ(又はコンビニ機能を持った小さな拠点)、子育て支援環境、多様な働き方(半農半X等)の実現、1次産業の担い手の育成・確保・・・等

(2) 近傍同士の都市部と農山漁村部が対等の立場で相互共生しながら課題解決する魅力的な圏域を構成するには、都市部に暮らす幅広い世代が、週末等に頻繁に近傍の農山漁村部に向かう動きを加速させる必要があるが、これに必要な広義のインフラには、どのようなものが考えられるか。

【例】 古民家レストラン、直売場、ネイチャーガイド、・・・等

(3) 都市部から農山漁村部へのベクトル(人の流れ)の受け皿としての「小さな拠点」の役割、あるべき姿とはどのようなものになるか。(都市住民が必要とする(期待する)小さな拠点とは。多様な人(カネ)の対流によるイノベーションのインキュベーションセンターも考えられるか)

2. 自動車の普及や道路ネットワークの整備等により人々の行動範囲が広がり、圏域が広域化、多様化(融解)するなかで、買い物や雇用の場が減少していく農山漁村部にも住み続けられる環境を維持。

(1) 農山漁村部に住みながら雇用の場である中心都市まで通う者が増大するなか、アクセス(通勤)の快適性を確保・向上させるために必要な広義のインフラには、どのようなものが考えられるか。

(2) 農山漁村部に住んでいる高齢者など移動弱者の移動・物流手段をどう確保していくか。例えば、自動運転やドローン、ウーバーは救いとなるか。